

いるようである。何のためのインターネットなのか非常にもったいない話である。SkypeやZoomを使えば、スマートフォンでも簡単にオンラインカンファレンスやミーティングに参加できる。国や地域を越えて異なる文化・経験を持つ人たちと直接意見を交わすことは、共感性の育成につながる。またこういったICTの活用の経験をさせておくことは、地域に軸足を置きながらも必要ならいつでもどこでも世界とつながることができる、少なくともそのような発想ができる人材を育成するという点でも有益だろう。

以上、私の製造業勤務経験を振り返りながら、これからの教育についてあれこれと書いてきた。当初は、第2次産業のモノづくりと品質管理になぞらえてまとめてみるつもりであった。しかし、書いているうちに、大学に求められる人づくりは、蒔かれた種がきちんと発芽し（前述のスイッチが入ることに対応）実を結ぶような土壌づくり環境づくり、そして付加価値をつけて市場に出荷するという第6次産業的なアナロジーのほうがすっきりすると思うようになったがいかがだろうか。浅く雑な話に終始してしまったが、特集テーマである「本学の教育の現在と未来を考える」際の参考になれば幸いである。

## 自分史を書く

杉 座 秀 親（現代社会学科教授）

### 自分史ブームを支えた考え方

1975年の8月に、歴史家の色川大吉氏が『ある昭和史－自分史の試み』を上梓された。そのなかに「わが個人史の試み」という章があり、文頭から個人史をこう言い切っている。「人は誰しも歴史をもっている。どんな町の片隅の陋巷に住む「庶民」といわれる者でも、その人なりの歴史をもっている。それはささやかなものであるかもしれない。誰にも顧みられず、ただ時の流れに消え去るものであるかもしれない。しかし、その人なりの歴史、個人史は、当人にとってかけがえのない「生きた証、であり、無限の思い出を秘めた喜怒哀楽の歴史である」と。この言説に押されて、10年後に自分史ブームがやってきた。当時は60歳から80歳までの世代の人たちが書き手であり、60代、70代の年齢層が毎年2,500点を発行するとして、年齢の間隔を20倍として掛け算にすると、年間5万点をこえる自分史が刊行されることになるといわれた。ブームはさらに続き、自分史学会の創設（1993年）、自分史大賞（1997年）が設立された。年老いて時間的にも経済的にもゆとりのある人が自分史を書くものだ、という生涯学習のひとつの固定観念が形成された。ちなみに「自分史・出版」で検索すると、パソコンで40万件以上がヒットする。

### 自分史のゼミを立ち上げる－若者にも自分史を

ある新聞が「私の履歴書」という欄をしつらえている。登場する人は人生の成功者で、生い立ちから現在までの物語は一ヶ月間で完結する。多くの物語は学卒者が大企業に就職し、幹部まで登りつめるまでをふり返ることを基本としている。

しかし1990年代から学卒者がすべて成功物語を収める時代は終わった。自己実現に行き着

くため、「やりたいこと」をみつける自己分析がはじまった。自己分析とは過去を見直すことと同じだ。90年代の終わりにはそれを見直し、「こうなりたい自分」をめざした将来志向の分析に変わる。つまりどういう人間であるかよりも、何ができるかを志望企業に売り込む自己マーケティングが就職活動になった。この過程で、自己分析は自分史という名称にかわる。このように就職活動の推移をみると、経験を秩序づけることに年齢差はない。私たちがめざす自分史は自己分析と重なる面もある。そこで形式を成功者の流れに真似し、学生がそれぞれ自伝のような作品を作成できたら、ゼミと卒業研究の目的は達成したことにしようと、自分史のゼミを始めることにした。

自分史のゼミを立ち上げた年のゼミ生は三人の女子だった。まず私が聞き手になってそれぞれの自分史の年表を作る作業を始めた。ところがいざ始めてみると、自分史を「思い出づくり」と勘違いして、彼女たちはとにかく喋った。喋って、喋って、喋りまくるのだった。運動会、修学旅行、遠足などなど。

そんなある日、大震災が私たちのゼミをも襲った。この出来事は彼女たちを圧倒した。当時の三人はこう書いた。「テレビで津波を見たとき日本は終わってしまうかも知れないと思った」、「今回の出来事で、私たちはいつどうやって「死」を迎えるのかわからないものだと思い知らされた」、「起きてすぐ、ふだんは読まない新聞に目をとおすようにした。そのたびに死者が増えていく状況にとんでもないことが起こったと思うようになった」(2012年卒)と。犠牲となったおびただしい人たちが、当たり前が当たり前でなくなる経験を教えてくれたのである。それぞれの四苦八苦を乗り越え、明けて新学期になり顔を合わせると、震災は「一生忘れることができない出来事になった」というので、不幸な出来事と承知のうえではあるが、若者もそれを人生の重大なひとつとしてそれぞれに受け止めることができたことに手ごたえを感じ、自分の人生で重要な出来事から書き始めることを自分史を書く基本方針として現在にいたっている。また、このような集合的記憶は消費されながらも、可能な限り正確な事実として語り継がれることに意味があるので、それからは追いかけてくる下級学年にも卒業研究で震災を語らせることにしている。

### 自分史ができあがるまで

ゼミは二年生の後半で自己論に関する図書を輪読し、三年生で自分史年表を作成し、最終学年で年表をもとに自分史を書く、という進め方をしている。年表の作成は自分史の骨格をなすので、各年の政治経済や事件から流行歌や流行語までを揃えてくれたテキストを指定する。毎週必ず割り当てられた事項を報告する約束をしているので、学生はこの作業に苦戦する。しかも見開きの右ページは自分の出来事を記述するために空白である。事項を調べた上に、自分のふり返りもしなければならぬので、自分史は就職に役立つ、と軽い気持ちでゼミを選んだ学生にとっては、約束がちがう、ということになる。ともあれ、報告時に他人に知られたいくないことがあればそれを差し置き、失敗したことだけは必ず記録しておくようにいう。四年生の前半で最小限の作文の技術の学習をし、それから自分史を書き始めるのである。成果物は二部作成し、一部は提出のため、もう一部は自分に聞かせる物語として保存するためである。

書き終わった学生の感想は次のようである。例えば「自分史を書き終えてみると、過去の自分と今の自分は同一人物なはずなのに、過去のことを綴っていると何故か客観的に誰かの記憶を見ているような気がして、これが過去の自分を記録する、つまり自分を確認することなのだ

と理解することができる」(2016年卒)。これが、自分史を書くときの決め手である。ゼミの目標は、現在からみた自分の体験をふり返り、整理し、それを文字にして記録として残すことである。文字化して過去の自分を現在の自分から切り離す作業を続けることにより、「自分を理解することは大変な作業であるし、見たくない部分も見ることが出てくる。そういった(見たくない：引用者補)考え、感情を消し去り、心からの理解をすることは簡単ではないが、その作業を経た自分史からは、必ず私への理解が得られる」(2015年卒)という自信がつく。自己にたいする理解が深まれば、現在から見た自分の過去を表現する厚みはより増すことになる。ここに若者が書く未来志向の自分史がある。

### 聞き手としての注意とこれからの自分史

自分史は自己表現の手段である。それを引き出すために、例えば授業で全員に「幼稚園の頃は楽しかったですか」と聞くと、「楽しかった」と答える。しかしなかには「病院が第二の家といってもいいくらい病弱だった私は、運動神経のない部類の人間だったため、運動会という行事が苦痛でしかたなかった」(2016年卒)と書く学生がいる。しかもこの学生は、運動会で活躍すると思っている親の期待に応えることができなかつたと後悔している。ここでは私は「幼稚園児は健康である」という前提で聞いていることに気づく。教室という場は「演ずる」場でもあるから、学生は本心を隠す。後日、授業以外でくつろいで一対一になったときなど、「ほかの人とちがう幼稚園生活」をとめどなく話すのだ。

関心に応じてくれるなら、それ以外の情報は必要としない私の態度を、学生は見抜いている。それは個々人に応じた聞き取りの仕組みを工夫してはどうか、という学生の問いかけでもある。誕生してから記憶に刻印されるまでの時間を、彼らは母子手帳やアルバム、ビデオ、保育所や幼稚園の連絡帳をもとに母親にインタビューし、言語をとおして二人で物語としての幼稚園生活をつくりあげる。しかもつくりあげる物語は、時間の系列にあるので生成を繰り返す。10年後、20年後、母親たちと彼らが語る幼稚園の生活はどのように生成するのか、おそらく現在と同じではないであろう。同様に学生が私に要求している役割は、彼らが「いま」の自分を十分に表現するために、過去と彼らの対話をとりもつさいに、私に手引きをもたないでください、ということである。すなわち先ほどのインタビューを例に取れば、親は子どもが生まれる前にあれこれと名前を考えるように、子どもの身体があつて名前をつけるのではなく、名前をつけることによって身体がわが子として存立していくようなイメージが物語のなかにある。この辺は難しいので、自分史が文字を用いて自分の記憶を呼び戻す性質をもつ、ということ念頭におきながら、自分史の授業を続けるつもりである。

これからの自分史は、高齢者の生涯学習の友であることはいまでもなく、自明であった人生航路がゆらいでいる現代を生きる若い人たちの振り返りの伴走者となってくれるであろう。また日本語教育学が資料や事実とともに聞き取りをとおして社会的事実の再構成をめざしているように、ひろくライフストーリー論と親縁性をもつことによって、高度な情報化がもたらす都市のなかで、しかも都市化によりそれ以前の言語が破壊されたなかで、自分を語る方法も生成していくであろう。他者の存在が収縮していく時代であるからこそ、自分史に期待が寄せられるのである。

## 参考及び引用文献

- ・色川大吉 2012『ある昭和史－自分史の試み』中公文庫（初出 1975 中央公論社）
  - ・色川大吉 2000『“元祖が語る” 自分史のすべて』草の根出版会
  - ・色川大吉・赤坂憲雄対談 2000「いま、自分史の時代」『別冊 東北学』作品社
  - ・小林多寿子 1997『物語られる「人生」－自分史を書くということ』学陽書房
  - ・桜井 厚 2012『ライフストーリー論 現代社会学ライブラリー7』弘文堂
  - ・『思想の科学－自分史を読む』NO120 1989 思想の科学社
  - ・三代純平編 2015『日本語教育学としてのライフストーリー－語りを聞き、書くということ』くろしお出版
- \* 学生の自分史からの引用は、『現代社会学科卒業研究要旨』をもとにし、本体から適切な部分のみを抽出した。『要旨』は公開されることを前提にして書かれているので、提出の時点で学生の了解をとってある。カッコ内は卒業した年をあらわしている。

# 管理栄養士養成、実践栄養士活動のために 必要な職業教育を考える

片 山 一 男（健康栄養学科教授）

## 1 はじめに

教育とは、一般的に文字通り解釈すれば、教養育てることであり、その意味はその人間の能力を引き出すこととある。さらに教育とは何か調べていくと人間らしく生きるためにあるいは望ましい状態にさせるために必要なもの。社会の中で生きていく為に必要な術、手段。人間が幸福な生き方や生きがいを見出すプロセスと手段、意図的な働きかけ等いくつかの記述、記載を目にすることができる。

筆者は人間らしく生きるために必要なものを教育と称するならば、人間の持つ最も大きい特徴すなわち、理性に対するはたらきかけこそ教育ということばに相応しいのではないかと考えている。このはたらきかけが結果として、はたらきかけた主体と相手との間で共鳴、共感をもたらすことが教育の効果の第一段階と言えるのではないだろうか。

## 2 医療における患者教育の実践から得られたもの

筆者は本学を含め大学に勤務して今年度で14年目をむかえる。大学の教員になる前に500床台の3つの病院、すなわち精神科7年、急性期医療の現場に21年、通算28年間を管理栄養士として勤務してきた。この間、医療における管理栄養士・栄養士の業務として、患者教育の一つである栄養指導（栄養に関する教育）と管理栄養士・栄養士養成施設から受け入れた実習生への指導を経験してきた。

精神科に勤務した7年間と中間管理職の任にあった後半7年間を除く14年間に実施した個別の栄養相談、指導件数はおよそ4000件であった。

患者教育とは、医療に関わる専門家が、治療にとって有益な情報・知識を患者や患者の家族、介護者に対して、適切に提供し、患者自身の行動変容を起こさせ、心身の状態を改善させるはたらきかけとされる。そして、その目標は患者のQOLの維持・向上にある。

したがって、医療の現場ではインフォームドコンセント、セカンドオピニオン、コンプライ